

書評

榊原千鶴著

『皇后になるということ 美子と明治と教育と』

松澤俊 二一

著者榊原千鶴は、本書「はじめに」において、皇后という存在について次のように記す。「彼女たちは、天皇の妻となることで結果的に皇后となり、それぞれに自らの皇后像を模索していく」、なかでも「近代の皇后像を新たに創り上げた美子（はるこ）の存在は重要であり、現代の皇后像を考えるうえで、決して遠い過去のものではありません」（一頁）。このような視座のもとに本書は近代皇后の祖型としての美子について、またその人が体現しようとした「明治の精神」の内実を問おうと試みる。

かかる目論見を掲げる本書の刊行は実際、きわめて時宜になかったことといえよう。というのも、たとえばおとし二〇一八年は「明治一五〇年」にあたり政府の関連施策が次々と実施されていた。翌一九年は周知のとおり皇位継承Ⅱ令和改元があった。明治期が顕彰の対象として幾度も蘇り、また天皇や改元という事態に嫌が応にも向かい合うことを余儀なくされるこの国の現状におい

て、本書の掲げるテーマはアクチュアリティに富み、多くの人の要望に応えるものだろう。

ところで、近代皇后の研究については想起すべきいくつかの先例がある。たとえば、片野真佐子は『明治天皇紀』、『昭憲皇太后史』などの文字資料を使って、美子を含む三代の皇后の足跡や役割を明らかにしている。また、錦絵など多数の絵画資料を用いて視覚的な「表象」から皇后像に迫ったのは若桑みどりだった。近年では原武史、小平美香らがまとめた仕事をしている。これらの諸論では、女子教育や殖産興業、福祉事業、洋装などの文明開化に皇后が果たした役割が強調されるわけだが、もちろん本書の考察もこれらの重要な論点を十分咀嚼しながら進められている。ただし、本書がとりわけて関心を寄せるのは皇后美子の前史である。つまり、美子がどのようにして「皇后」になったかという問題に（皇后として政治的／社会的にどのようなふるまったか、よりも）力

点は置かれている。美子がいかなる教育を享受したのか、またそうなるべく自ら意志的にどのように努めたのかなどの主体形成の諸問題を教育、特に書物の内容の受・授の場面に注目して描こうとするのだ。この意味では『皇后になるということ』という書名はまことに適切である。

また、その書名は例のポーヴォワールの「人は女に生まれるのではない、女になるのだ」という宣明とも遠く響き合っている。皇后というジェンダー化された役割を美子がどのように体現していったのか。また、彼女がこの国にとっての理想的な女子を、自ら関与しながら、どのように作り上げたのか。その奮闘を、本書は「幕末から、美子が編纂を命じた『婦女鑑』の成立（一八八七年）まで」（一三二頁）の二〇年余りを検討時期として可視化しようとする。

それでは、各章を概括しながら、本書の具体的な中身に分け入っていこう。

本書は全五章からなる。執筆意図などが書かれる「はじめに」のあとに置かれたのは第一章「天皇のために！問われる覚悟」である。ここでは、宮中における「内廷夜話」にスポットを当てる。その集まりは「天皇の補佐や指導にあたる侍補が、毎夜七時から九時までの約二時間、その日の出来事や古今の政治体制、政治上の成功や

失敗について、天皇とざっくばらんに語り合う試み」（一七頁）だが、美子はそれへの参加を許されていた。

席上の美子は単なる傍観者ではなく「議論の内容を理解し、ときには対立する意見に割って入ることができるほど」（二三頁）にその賢明さを示していく。では、そこでどのような試みが具体的に行われていたか。著者が特に着目するのは詠史和歌によるパフォーマンスである。

詠史和歌の「本来の目的は、望ましき国のありようと、そうした国を支えてきたのはどのような人々であったかを示すこと」（四一頁）だった。天皇は内廷夜話も含む折々の機会に側近たちに和歌や漢詩を詠ませている。対して美子や女官たちは、たとえば、ヤマトタケルを救うために自ら海中に身を投げた「弟橘媛」を題として詠む。そうして「いざとなれば、天皇を守るために命を投げ出すこともいとわない」（四四頁）精神や覚悟を「歌によって表明した」（同）のだという。また、美子は古代中国の周王室の繁栄をもたらした「姜后」を題として詠むことで、自らその先例に倣うことを宣言し、女官たちにも後宮での理想的なふるまい方を教えた。残された和歌の読解を通じて、天皇を支える女性たちのメンタリティに迫る第一章である。

第二章「ふたりの指導者と「嫉妬はするな」の教え」

では、美子の皇后となる以前、一〇代の頃から身につけてきた学問に焦点が当てられる。キーパーソンは若江薫子におこと元田永孚ながねという二人の師である。

まず薫子は美子が一条家にいた一歳頃の頃からその教育係となった。漢学を中心に、和歌や礼式などの指導を行った。岩倉具視にも助言し、その入内にも関わった。

一方、元田永孚は入内後の美子の「侍読」としてその教育に関わった。では、この二人が美子にどのような教育を施したのか。この問いに対して、著者は特に『女四書』という書物に注目して応じている。同書は中国にルーツを持つテキストで、「女誠」、「女論語」、「内訓」、「女範捷録」をまとめて一書としたものである。薫子も永孚も、この書を用いながら、美子に「夫婦仲良く、さらに子孫繁栄であるよう、皇后は妾に嫉妬しない、妾同士も互いに嫉妬し合うな、ということ」(七六頁)を教えていた。二人の師は、天皇を支えて後宮の安定と平穩を保つことで、間接的に新たな国づくりに貢献するよう美子を教育したのである。

第三章「武器としての学問」では、薫子や永孚の指導をうけて成長した皇后美子が明治新政府の政策にどう応じていったかが描かれる。

維新後まもなく一九七一、七二年に西郷隆盛ら政府要

人たちは宮中の改革を実行し、女官三六人を罷免した。彼女たちが「女官の習慣や先例、古くからのしきたりばかりを頑なに守り」(二二〇頁)、「ともすれば天皇の徳を妨げることもあった」(同)からである。その後、女官は全て皇后付きとなり、「美子は彼女らを統括する立場」(同)となった。

改革派の人々は美子に期待した。美子も欧化政策、たとえば洋装化について、それに応えた。美子は天皇にも先立ってその重要性に気づき(その妻としての分を越えぬよう慎重に振るまいながら)一八八七年には「女性の服制に関する思召書」を発している。美子は、洋装化を海外の情勢に目を向けたときに必要な政策として理解していた。実際それは尊皇攘夷思想を貫いた師薫子の教えと距離があったが、美子は皇后として、政治や社会の行くべき方向性を明敏に察し、それをリードしようとしたのである。

次いで第四章と第五章では、美子が二冊の道德書の編纂を通じて次世代の女子達を積極的に育成、薫陶しようとした様子が語られる。まず、第四章では『明治孝節録』(一八七七)が取り上げられた。

同書は「善行者の伝記を広く収集して一書とする試み」(二五五頁)だが、その編纂は当時最新のメディアであっ

た新聞も情報源として取り入れて行われた。美子は官報の他に九誌を熱心に愛読するほど新聞に親しんでいたし、またそれゆえに、新しいメディアの効力にも鋭敏だった。『明治孝節録』の編纂においては、当時の新聞が持った大衆の感情に訴えかける煽情的な方法も取り入れながら「国家が求める「道徳」を示し、社会秩序の回復を試みようとした」(二六六頁)のだった。

また、本章で著者は『明治孝節録』の内容に明治政府の方針とも逸脱する内容が存在することに注目している。確かにそれは「家族への献身を説く儒教思想を基盤としている」(一六九頁)テキストだった。しかし、取り上げられた女性のなかで、たとえば、ます、ふち、なかの事蹟は学校教育を足がかりとしながら自らの経済的・精神的自立を遂げていく物語としても読むことが可能である。つまり「わずかではあっても、個としての意思の存在や自立の可能性を垣間見せる女性像が、そこに取られている」(一六九頁)のだという。もちろん、これは本来的には「家父長制に基づく政治体制の維持をめざす為政者にとっては、不都合なはずの女性像」(一七四頁)だった。けれども一方で、教育の重要性を説く美子や側近たちには甘受すべき新しい女性たちの姿であったことを著者は指摘する。

続く第五章では同じく美子の内旨により編纂された『婦女鑑』(一八八七)に焦点が当てられる。ここでは、まずその前身ともいえるべき『幼学綱要』(一八八二)について触れ、二つの書の差異に言及しながら、美子が企図した明治二〇年代の女子教育の在り様について考察を進めている。

まず、『幼学綱要』だが、これは明治天皇の肝いりで元田永孚に命じて編纂された。天皇はその出来に満足して「側近はもとより、宮内省に勤務する官吏や、華族女学校」(二七八・一七九頁)にも与え、しかも「毎晩夕食後には、若手の女官たちに向けて、天皇みずから講義」(二七九頁)も行った。それは女子教育にも応用しうるテキストだったからである。

同書には二二九の例話(日本一二二話、中国一二七話)が引かれ、そのうち女性に関わるものは三三話が採録された。そのなかでは特に「和順」と「貞操」の重要性が説かれた。『幼学綱要』の強調するこの二つの徳目は前節で見た『明治孝節録』とも通じ、後の『婦女鑑』にも引き継がれてゆく。このように、官製のテキストのなかでは家父長制を基盤として、夫とその家に奉仕する自己犠牲の精神の重要性が綿々と受け継がれ説かれていたのである。

けれども、『婦女鑑』はそれまでの二書と明確に異なっていた。それは、このテキストが「将来国家の指導者の妻、あるいは母として、他国との交流を想定する華族女学校の女生徒を対象」（二二〇頁）として想定していたということだった。そのため、例話の出典に西洋も加わり、たとえば学者として大成したイタリアの「羅拉^{ローラ}」やドイツの「加羅林路古勒西^{カロリンブルク}」、またキリスト教思想を背景として「愛国」の徳目を説く「若安達亜克^{ジョアンダイク}」などの逸話も含まれることとなった。もちろん、西洋に生まれた彼女たちの事績やその功績は必ずしも儒教思想の枠内におさまるものではない。けれども、新しい時代の模範的女性像、まさしく婦女の鑑の一例として彼女たちの事績は選ばれた。そして、「女性を男性の付属物、補助的存在と位置づけるのではなく、ひとりの人間として、その才能、行動を認め、称賛する」（二二〇頁）内容や「女性の学びを尊重する」（同上）というメッセージが示されていくのである。著者は、こうした点に美子自身の「意識の変化」（同上）があると見て取っている。

さて、ここまで五章それぞれの内容について概括してきた。さらに以下では、評者から見て特に興味深く思われた二、三の点について言及しておきたい。

最初に、第一章で詳説されていた詠史和歌に関連して

である。先にも記したが、本書はその試みを、美子はじめ女官たちが天皇の目前で自己犠牲の精神を表明するパフォーマンスな取り組みでもあったことを論じていた。この指摘を評者は大変面白く受け止めた。それというのも、アカデミックなレベルの明治期和歌研究において天皇、皇后の和歌はほとんど論じられてきておらず（特に美子や女官との応答について論じたものは皆無と思われる）、さらにその効果や役割についての言及にも十分説得力を感じたからである。宮中において、かかる和歌による自己犠牲のメンタリテイの養成、熏陶が行われていたとすれば、その情緒的な圏域は除々に広がり、やがて和歌による国民教育の可能性も視野に入ってくるだろう。たとえば、評者はここで、アジア・太平洋戦争のまっただ中に編まれた「愛国百人一首」（一九四二）などを想起しているのだが、そのような近代日本における国民の教育装置としての和歌の社会的役割（「文学」としてのそれではなく）について、本書からは多く示唆されるころがあった。

次に、本書を女性の読書史として読むことも面白からう。女性たちが何を、どのように読んできたのか、本書には様々な情報が散りばめられている。たとえば、美子その人に焦点を合わせるならば、『女四書』をはじめ

『帝鑑図説』や『南亭余韻』などの書名が挙がっているし、また、女官たちならば彼女たちの「源氏物語」や「枕草子」受容の場面なども興味深い。また、これは書かれていないけれども、たとえば美子の師薫子が中国の経書や歴史書をどのように読み、漢学の素養を身につけたのかとか、それは周囲の人々に歓迎されていたのかとか、あるいは、まだ幼かった美子とともに漢学の書をどのように読み進めていたのかとか、当時の女性たちの読書スタイルや読書環境について、さまざまな問いや想像を、本書を読みつつ思い巡らせることができる。書物は女性たちに喜びや楽しみを与え、また未来への可能性もうかがわせた。一方で、女性であることの社会的な制限を教え、それに順応するようにも求めた。あるいは夫のみならず国や天皇のために自己犠牲の重要性も教えた。本書では、様々な読書の可能性と魅力が、また潜在的な恐ろしさまでが語られているのだ。

さらに女性の読書という面にこだわらなければ、本書にはまだ残された重要な問題がある。それは、美子が関わった『明治孝節録』や『婦女鑑』などが当の少女たちに実際にどのように読まれていたかという点だ。美子が次世代を担う女性たちをそれらの書物を通じて、どのように育成しようとしたかについては本書に明瞭に書かれてい

る。けれども、一方でその志を少女たちが実際にどう受け止めていたかまでは書かれていない。この点は、著者による後著の登場を待つこととしたい。

さて、このように本書は美子の自己形成史を主眼としながら、その学びの在り様や教育への熱意、創意の数々を生き生きと描き出している。しかし、彼女があらゆる場面で万能だったわけではないこと、また「国母」として国民に自己犠牲を促す役割を担ってしまった点にもきちんと注意している。その功・罪を抑制のきいた筆致で書き分けている点も本書の魅力の一つと言えるのだ。

また、本書で展開されている考察は慎重な資料読解をふまえた明快なものであり、しかし、文体はやわらかな「です・ます」調で簡明に書かれている。多くの図像が挿入されていること、資料の現代語訳もあることも読者の理解を助けるだろう。あざやかなピンクの表紙も目を惹く。こうした点で本書は一般の読者にも親切で、手に取りやすい仕上がりとなっている。この好著について、大方の愛読を勧めたい。

△二〇一九年二月一八日刊、三弥井書店、四六判、

二四〇頁、一三〇〇円＋税

(まつぎわ・しゅんじ／桃山学院大学准教授)